

槐

かい

岡井省二創刊

平成21年7月号

平成二十一年七月一日発行 第十九巻第七号 通巻第二一七号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



宇宙の意思

高橋将夫

山葵田の水を辛しと思ふかな
もぐさより餅になりたき蓬かな
囀りの中の沈黙モアイ像
蛤を盛りたる遊戯の器かな

「俳壇」五月号より七句

五月 闇音も匂ひもなかりけり
その中に秘密ありそな茂りかな
夏 落葉かならず誰か天仰ぐ
柏餅あれば数へてしまふなり
ストレスの無きもストレス蝸牛
魂は濡るることなし梅雨の月
万緑も宇宙の意思でありしかな

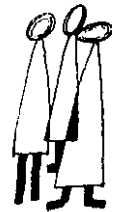
槐安集

水野恒彦

血脈の濃くまた淡く桜かな
永き日の影踏む遊びつづけをり
肉感の日に耀える紫木蓮
暮れ方の無縫の海の蜃気楼
むつつりと眠そう昼の八重桜

延広禎一

夕星や亀鳴いてをる籠堂
竜化して老梅となる虚空かな
かぎろへる赤膚焼の宝相華
春星座神話の扉開かるる
水を渡り花をくぐりて花の山



加藤みき

皮剥かれなほ紅を持つ櫻鯛
蝌蚪に足地球の外に人住めり
花筏盗賊かもめ混じりたる
段取りのうち火の入る新牛蒡
優曇華の間違ひのなき並びかな

石脇みはる

真髓とはと問ひかけてをる葦の角
早蕨の綿毛つきたる掌
猩々袴咲く岩肌を水流る
凸凹の夏野足元より暮れし
三ツ編の少女に触れしさくらかな

中島陽華

春の闇灯に動く口ありき
老酒のザラメ溶けたる山つつじ
とみこうみしては醍醐の櫻かな
渦潮の渦巻きそこね恙なし
方舟や観音とり巻く花の山

栗栖恵通子

良の臚まとひて舟よばひ
逃水に何の浮橋かかりをる
針千本万本呑んで西東忌
逆打ちの四国八十八夜かな
とうさんは星になりたり青葉潮

竹内悦子

水音を集めて落花舞ひ上がる
松の花背のびして日を浴びにけり
つげの櫛買ひをる八十八夜かな
花吹雪地をももいろにころがして
たんぽぽの絮宇宙遊泳して来たの

大島翠木

竜天に登るぬた場の泥を踏み
あんぱんの艶とごま粒ひばり笛
満開の花冷え白き香と思ふ
寿限無じゆげむと花の吹雪を打ちかむり
忙しく春は逝くなり銭の花

雨村敏子

胎内ももいろ花の風吹き抜く
かぎろへる石の寝釈迦も水音も
山のべの闍伽照つてをる桃の花
渦潮の消えたる向かう海市たつ
花守の山より帰る火照りかな

小形さとる

沈丁やうつそ身にして香りある
春闌くや泡あぶくは泡引き寄せて
さりながら宵の杏の匂ひかな
魂吸ふて幼いたいけ気けないぞ春の山
卯月永しボ口が出るボ口が出る

本多俊子

精霊の浮き立つ白き夕さくら
かり吉野にてそめの石に足とめ桜かな
春露の香りの中に母のゐる
みどり子の耳透きとほる日雀かな
花鎮め神にいたたく水うま美し

久津見風牛

水晶体開かれてゐる春の虹
穀雨かな心に決めしは口にせず
代を搔く生け簀に鯉の跳ねてをり
にぎり飯開帳寺の大太鼓
幹高く剪定鋏を夢の中

近藤 きくえ

天地の弾んでゐたる穀雨かな
振り塩の魚の眼や花の冷え
法灯の絶ゆることなき櫻かな
ふふみぬる甘茶幼なき日々つむぐ
身のうちにをさめたきこの花吹雪

近藤 喜子

花過ぎの心しばらく白きかな
ふらここや両脚おほひなる翼
天と地のぶつかり合ひて墓出づる
青麦やきりりと王義之の書体
縄文の静けさにあり夜の浅蜩

谷村 幸子

多羅葉の雄木雌木共に花咲けり
花明かり杉戸絵の雉子こちら向く
春水の音熊笹に榛の木に
大川に帯となりたる花筏
大魚板芭蕉玉解く万福寺

瀬川 公馨

黒だかりせる三月の烏山
春の月口あけてをる無間かな
宵越しの金をもたずや仏の座
海棠の根元シベリア俘虜記なり
花冷や大地を焦がし焦がしける

槐市集

岩下芳子

甘苦き春の潮でありにけり
結構なお服加減や花の下
花の山の入口にある駐在所
連翹のまぶしき色を抱へたる
花筏汀に寄れば屯する

岩月優美子

ひとときの魔法でありし花吹雪
鱧飴の味噌の香の立つ花の冷え
鈴生りのパイヤ青し復活祭
春曉の波音高しネプチューン
本堂の扉の全開に墓鳴けり

宇田喜美栄

惜春や月をかかげし浮御堂
自転車でウロウロしたる涅槃西風
脇道に逸れて草原遊糸かな
蜂の巣の一日みぬ間の大ききよ
春雷一閃夜ふけの湯殿にて

大山里

牛馬もほとけとなりて花の下
桃さくら咲けり応へのなき家に
すかんぽや背中流してくれにけり
常磐木落葉老犬の通り過ぎ
青草のあやふき甘え蹊に



槐集

高橋将夫選

おひさまのくすぐる山の笑ひけり
枚方 中野 京子

花の山時の大河にとどまりし
春満月鍵かけてあるガラス窓

わが齡星の齡や春蛾過ぎ

春キャベツざくざく刻みつがなし

蓬摘む百会乾いて来りけり
富松 寛子

菜の花やしづかに過ぐる乳母車

たをやかに胎児はぐくむ春満月

風起ちて子をとろ子とろ夕桜

手箒にいのちの重さ落椿

潮風や身は天竺の花衣
京都 竹中 一花

白象に乗りし菩薩と春惜む

花守の花に酔ひたる煙草かな

櫻鯛骨の髓まで真なり

葉櫻にさみどりの水照り返す

どこまでも芝桜金太郎飴
摂津 中田 禎子

人間の衣脱ぎ捨て花の中

恋猫の卒都婆小町なりにけり

春昼や墨絵に色の立ちにけり

なまぬるき山の風来る大田螺

渦巻くは六条河原の花筏
東京 西村 純太

花冷や月に一度の泥酔日

迷宮の扉に佇つ荷風の忌なりけり

若女深井の面テや鏡臙

宙吊りのピエロ溶けゆく暮春かな

牧神の午後満天星の花ふふむ
ヴァンヌフニジャンキー 守口 柳川 晋

補助線を消し忘れたる花の奥

安南に乗込みたりし花見鯛

ちらちらと修羅と桜を見てゐたる

法螺の穴からのつと蜃気楼

銀河往来 高橋将夫

花の山時の大河にとどまりし 中野 京子

花の山、例えば吉野山であろうか。南朝の都であったのも、今は昔のこと。そんな大きな時代の流れの中で、吉野山は変わることなく存在している。時の大河にとどまっている。もつとも、吉野の花には危機が迫っているとのことではあるが。

〈おひさまのくすぐる山の笑ひけり 京子〉

たをやかに胎児はぐくむ春満月 富松 寛子
母親の胎内で子が元気に育っている。時あたかも春の満月。まるで、月光が胎児をはぐくんでいるようだ。そこには、誕生する生命への憧憬の眼差がある。月と潮の干満の関係、月と人体の営みの関係を思わせる一句でもある。

〈手箒にいのちの重さ落椿 寛子〉

櫻 鯛骨の髓まで真なり 竹中 一花
鯛は骨の髓まで真だという。櫻鯛であるから、こよなくめでたい。俗に、腐っても鯛というが、鯛は骨の髓まで真なのだ。拙句集『真髓』への挨拶句というより、全く独立した立句といえよう。

春昼や墨絵に色の立ちにけり 中田 禎子

春の昼には霞がかかったような、どこかものうい雰囲気がある。

「墨絵に色の立ち」はそんな春昼ならではの感覚といえよう。

薄墨桜の色がぼんやりと浮かんできそう。

渦巻くは六条河原の花筏 西村 純太
花筏が渦を巻いている。場所が京都の鴨川の六条河原だということから尋常でない。昔、斬首が行なわれたところ。美しくも妖しい景。

ちらちらと修羅と桜を見てみたる 柳川 晋
美しい桜を見る一方で修羅場も目撃したという。せつかく風流を楽しんでいるのに、興ざめである。人生、なかなか思い通りにはいかないものだ。

騙し絵の窓に春光入りにけり 岩月優美子
騙し絵に描かれた窓だから、一見窓と気づかぬ窓なのだろう。そんな窓にも春の日は注ぐという。天網ではないが、春の日もまたあまねく注ぐのである。俳諧。

鳩浮かぶおのが潜りし輪の外に 久保東海司
鳩が潜って、そこに水輪ができた。浮かんできたのは、そこから少し離れたところだった。自らが作った輪の外に浮かんだと捉えたところが、作者ならではの視点。

連翹の花の数ほど母のこと 近藤 公子
連翹はたくさんの長い枝ごとに花をびっしりと咲かせる。中には枝垂れた枝もある。そんな花の数ほど、母の思い出は多い。異論はない。